

2019. 5. 1
月刊通信

はなしがい

第394号

よりよい未来の教育のために
子どもたちの現実を見つめて

コトバ表現研究所 渡辺知明

〒141-0022 品川区東五反田2-15-6-515
電話&FAX. 03-3445-6499 振替 00130-6-577697

電子メール w-tomo@tokyo.email.ne.jp
http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/

頒価50円（1年1,500円千共）

今、わたしは読書論の本の最終仕上げにとりかかっています。タイトルは『読書の教科書——精読のすすめ』です。これでわたしが書く「教科書」は3冊目になります。全体は四部構成です。

第一部は読書論として、読書とは何なのか根本から考えました。第二部が文の読み方の基本です。短い文をていねいに読む読み方について書きました。

第三部は短い文章の読解法です。日本国憲法「前文」、ジョージ・オーウェルの書いたSF小説『一九八四年』の付録「ニュースピーク」という恐怖の言語政策、若山牧水の紀行文、スペインの哲学者オルテガの芸術論、ニーチェの原因論などの総合的な読み方を取りあげました。第四部は「道具箱」と称して、読書に役立つ「道具」を取りそろえておきました。

この間、いろいろな読書論の本を読んできました。おそらく数十冊になるでしょう。ところが、本当に読書のために役に立つような本がほとんどありませんでした。あらためて考えてみたら、わたしたちは本の読み方を教わったことがありません。学校で習ったのは、本の読み方ではありません。教科書に収録

された文章の読み方なのです。

本の読み方と言ったら、本をどのように取り扱いかということから始まります。わたしは、専門学校では、本の開き方から教えたこともあります。そんなことは小学生のころに教わるくらいでしょう。おとなは、本の読み方などわかっていくつもりでいます。はたして本当に本が読めているのでしょうか。

わたしたちは読書法を文章の読み方として学校で習いました。それは「三読法」とよばれる読み方です。「通読」「精読」「味読」という三段階の読み方です。おそらく、たいいていの人々がそれをおとなになっても続けています。

学校で習った「通読」は、一般の読書法でいうならば「速読」です。現代社会では、たくさん本を読むことを目標にして、速読が流行っています。ところが、「精読」や「味読」については十分に書かれた本がありません。速読に対抗して、「遅読」などという言い方も出てきていますが、発想のおもしろさにとどまっています。

●読書論・読書法・読書術

本の読み方については、三つの分野があります。読書論・読書法・読書術の三段階です。一般の読書の本では、この三つが入り混じっています。「読書論」では、読書の意義や目的が語られます。「読書法」というのは、基本的な読書の方法です。たとえば、黙読か音読か、速く読むかゆっくり読むか、メモやノートをどのように取るかなどの方法です。そして、「読書術」とは、実際に本を読むときに、どうやって読むのかという実践的な技術です。

ところが、一般の読書の本は、読書論から読書法までは書かれているのですが、実践に必要な「読書術」がありません。読書の方法を示しても、技術が不明なのです。技術というのは思想の具体化です。そのかわり、自分の読んだ本をたくさんならべて読書の感想文のようなものでお茶を濁しています。

わたしが書くこうと思ったのは、読書論から始まって読書術にまで具体化された読書の本です。それは、ほとんど前例のない本ですから、いろいろ考えて書き方に苦労しました。しかし、じつに単純なことに

気がつきました。本を読むことの根本が分かりまし

た。本を読むことは文章を読むことです。そして、文章を読むためには文を読まなければなりません。

ところが一般の読書の本では、文や文章が読めるのは当たり前のように考えられていて、もっぱら本の中身を問題にします。本の読み方の根本について目が届いていません。だから、長い文章を引用しておいて「おもしろいでしょう」「いい文章ですぬ」などと感想を言うだけで済ましています。どう読むか、その読み方が書いてありません。

引用文が途中で出てきたら、たいいていの人はそこを読まずに飛ばすものです。文章の流れとは異質な内容なのですから、とても読む気にはなりません。文章を書く人にも、本を読むことについて理解が不足しているようです。文章というものは、一文一文が順を追ってつながっているものなのです。

●読書による読書術の訓練

わたしが最終的にたどり着いた書き方は、本を読むことそれ自体が読書のトレーニングになるような

本です。つまり、わたしの本を読むうちに、いつの間にか読書の方法が身についてしまうような本です。そのヒントになったのは、スペインの哲学者であるホセ・オルテガ・イ・ガセットが語る哲学の講演です。『オルテガ著作集全8巻』（白水社1970）に収録されている「哲学の起源（第一巻）」「哲学とは何か（第6巻）」などを読んでみると、その場で実際に講義を聴いているような気持ちになります。

日本では近ごろ、オルテガの著書『大衆の反逆』という現代文明論の本が話題されています。しかし、これがオルテガの代表作のように考えられては困ります。オルテガの本領は、哲学の近代を切り開いたニーチェの思想を受け継いで、さらに根本から哲学を問い直している哲学者なのです。

わたしはオルテガの語りから、「本を読むことと考えることは同じですよ」と教えられたような気がします。たしかに、読書の過程でオルテガとともに、哲学について根本から考えているのです。

わたしは自分の本もそのようなものにしたと思うたのです。それは、本全体が一通り見渡せるように

なった段階のときでした。そのとき、以前に塾で作成していた学習プリントを思い出しました。わたしが作成したのは、文章を読んでいくときに浮かんでくる疑問を、順序どおりに設問としたものです。

たとえば、魯迅「故郷」の書き出しの一文です。「厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。」

これについて、「季節はいつか?」「どのくらい遠くから来たのか?」「何日くらいかかったのか?」「わたしの年齢はいくつくらいか?」といった問題を並べていくのです。今から考えると、それこそ文章を読むことの基本だったわけですね。

さて、いよいよわたしは原稿の最終仕上げにかかります。わたしの思う通りに、これまででない読書の本が仕上がるかどうか多少の不安もあります。しかし、みなさんがこの本を読むことによって、読書の能力が身につけられる本にしたいのです。それはこれからのわたしの努力にかかっています。ぜひ、いままででない読書の本を読んでいただきたいと思っています。